国際舞踊学会と日本

ＩＴＩ舞踊学会報告
(Internatinal Theater Institute)

筑波大学　若松美黄

1. 参　　加

１９８８年６月10日～15日，ＩＴＩ舞踊学会が西ドイツのエッセンで行なわれた。学会の開催については舞踊学会のシュミット氏の講演レポートに見られるが，ＩＴＩ日本支部から市川雅氏のところに連絡があったのは，２月中頃と云う。

学会として早急に参加者を募ることになったが急なことで参加者が決まらず，市川氏の他，６月にパリに行く予定を立てていた私が，日程を多少ずらして参加することとなった。私は，11世紀の壁画修復を見るためにパリ郊外のムティエMoutiers，さらに死の舞踏で知られているラ・フェルテ・ルピエル La Ferté Loupiére を訪れる予定であった。

ＩＴＩドイツ支部はベルリン。書類の往来があり期限を過ぎて，日本は例外として受け付けられた。タイトルは「パフォーマンスを超えて：今日の舞踊学」Beyond Performance : Dance Scholarship Today。早急に日本の状況についてのペーパーを送るように要請され，市川氏と手分けして，論文を送付したのが４月末。ベルリンより，参加認定書とともに学会スケジュール，プログラム，そして参加予定者からのペーパーが送られて来た。重量約３キロ，約30人分，手書きのコピーを含む，それぞれのスタイルの，いわば提出したままのコピーであった。

プログラムを読むと，率直に云って，いくつかの疑問点が沸いて来た。

第一に世界を網羅していないようである。国別報告で，日本のレポートを香港舞踏学院の Mr. C. Wolz，韓国のレポートをハワイ大学の Mrs. J. Zile，その他，各国の代表が，どのように出てくるのかいささか疑問，さらに一番近い，フランス，スペイン，などが名を連ねていない。第二に，現代の学会に不可欠な科学技術が使われていないようだ。例えばレポートに，スライド等の準備が無い，英語のみの会議（結果的にドイツ語の通訳はついたが），又原稿をファックスで送れば，即時にベルリンに着くはずなのに，最初からその考慮が見られない，等であった。

2. エッセンの学会

開会式　学会指定のホテルで，事務手続き費用等を納め，夜６時からグリロ劇場 Grillo-Theater ロビーで，開会式。ほとんど席はなく，立ったままの１時間半のセレモニーは，日本では不満が出るところ。

英語ドイツ語，他スペイン語で挨拶。Linke, M.（ＩＴＩドイツ支部の実行委員長）　Reuschenbach, P.（エッセン市長）　Cohen, S.（企画委員長）　de Alba, P.（メキシコ国立舞踊団ソリスト）　Markard, A.（振付師・クルトヨースの娘）

夜８時より，同劇場でクルトヨースの作品三作，ヨース・バレエ団。

Big City, Pavane on the Death of an Infants, The Green Table,

10時より，同劇場カフェテリアで懇談会。

3. 学会プログラムと協賛公演

学会は連日，９時より５時半まで，エッセン中央美術館会議室で研究会，夜は８時前後より，エッセン又は，電車バス等の乗り物で片道１時間程度の近郊都市における協賛公演へ往復。ホテルに帰ると深夜１時を越すこともあり，夕食が取れないこともあった。朝は７時半には，食堂に行くのが通例スケジュール，極めてハード，しかし７割方の参加者は殆どこのスケジュールに従っているのは，大いなる驚きであった。

協賛公演は，ウエストファーレン地区第三回ダンスフェスティヴァルの協力を得，前述のヨースバレエ団の他，ピナ・バッシュやラインヒルド・ホフマン，ケルン・バレエ団，バウハウス・タンツ，などのドイツ派が多い。

学会スケジュールを以下記す（Ⅰ～Ⅳは９：00—17：30までの四段階の時間帯，＊はその時間帯の司会者，；は共同発表）。

JUNE　11 th,

Peters, K.（西ドイツ）の紹介・挨拶に続き，舞踊評論，舞踊研究，舞踊図書，舞踊学位，大学施設教育等に関する各国の報告がおこなわれた。

Ⅰ，西ヨーロッパ国別報告

＊Aschengreen, E.(デンマーク), Brinson, P.(英国), Celi, C.(イタリー), Müller, H.(西ドイツ), Oberzaucher-Schüller, G.(オーストリア), Van Schaik, E.(オランダ), 他, ポルトガルの報告あり。

Ⅱ, オーストラリア, オセアニア報告

＊Craig, V.(オーストラリア), Shennan, J.(ニュージランド).

Ⅲ, アジア報告

＊市川雅, Wolz, C.(日本), Jian-Ping, O.(中国), Zile, J.(韓国), Vatsyayan, K.(インド).

Ⅳ, アメリカ大陸報告

De Alba, P.(メキシコ), Ehrmann, H.(チリー), Jose'Faro, A.(ブラジル), ＊Cohen, S.(USA).

JUNE 12th,

Ⅰ, 東ヨーロッパ報告

＊Dieners, G.(ハンガリー), Hoskovà, J.(チェコ), Kant, M.(東ドイツ), Neubauer, H.(ユーゴ), Pudelek, J.(ポーランド), Raftis, A.(ギリシア), Sourits, E., Uralskaja, V.(ソ連).

Ⅱ, アフリカ報告

Clark, E.(ナイジェリア), Grau, A.(英国), ＊Lokko, S.(ガーナ).

Ⅲ, 文献研究

＊Oswald, G.(USA); Dahms, S.(オーストリア), Jackson, G.(USA), Peter, M., Peter, K.(西ドイツ), Pritchard, J.(英国).

Ⅳ, 舞踊ジャーナル報告

Dorris, G.(USA); Hosková, J.(チェコ), Manor, G.(イスラエル), ＊Muller, H.(西ドイツ), Jian-Ping, O.(中国), Pudelk, J.(ポーランド), Ralph, R.(英国), Sasportes, J.(イタリー), Zile, J.(USA).

JUNE 13th,

Ⅰ, 討論形式, 舞踊学者養成

Odom, S.(カナダ); Kaeppler, A.(USA), Ruyter, N.(USA), Siegel, M.(USA).

Ⅱ, A, 舞踊史の領域規定

Schlundt, C.(USA); Ruyter, N.(USA), Thomas, E.(USA).

B, 歴史的舞踊理論の取り上げ方

Franko, M.(USA).

JUNE 14th,

Ⅰ, A, 文化人類学, 社会学, 文化史の活用

Novack, C.(USA); Sussmann, L.(USA), Manning, S.(USA).

B, 現代の伝記研究の諸問題

Sowell, D.

Ⅱ, A, 記号学, 精神分析, マルキシズム分析法の活用

Foster, S.(USA); Kant, M.(東ドイツ).

B, イコノグラフィーの例証と根拠

Au, S.(USA).

Ⅲ, A, 舞踊譜の活用

Grelinger, E.(英国).

B, 1860年代から1910年までのバレエスタイルの変遷

Jackson, G.(USA).

Ⅳ, A, 再演一復活の場合の表現の正確さ

Maletic, V.(USA); Manning, S.(USA); Novack, C.(USA).

B, ドイツとアメリカモダンダンス

Bergson, I.(USA).

JUNE 15th,

Ⅰ, A, 復興

ニジンスキーの「牧神の午後」: Jeschke, C.(西ドイツ)～ニジンスキーの「春の祭典」: ミリセント・ハドソンとケネス・アーチャー(英国)のインタヴューのヴィデオ＝ミリセント・ハドソンとケネス・アーチャー出演によるダンス・テレビ・番組のこの視点, Ipiotis, C.ホスト, ARCビデオダンスとプロデュサーのご好意により提供/Bush, J.とIpiotis, C.製作。

B, 現代の舞踊美学刊行物

Carter, C.(USA).

Ⅱ, 近い将来の企画: 文献, 展示, 記録, 出版

Grauer, R.(USA), Vial, K.(西ドイツ)他.

Ⅲ/Ⅳ, 近い将来の企画: 交流プログラム, ジョイント・プロジェクト, 国際的組織

Cohen, S.(USA), Oswald, G.(USA), Souritz, E.(ソ連), Wolz, C.(香港)他.

4. 国際舞踊学会について

1) USA勢力の強さ

企画のコーヘン博士は, 全体の進行にも気を配り, さながら女帝の貫禄。彼女の個人的親交で, 我々に馴染み深いヨーロッパの舞踊学者が集められたように思われる。ただ, 社会主義国の人材は, ユネスコを通じ正式な機関のものらしい。

参加者を見るとUSAの参加会員が多い。USAの場合, それぞれが, 助成金を得て参加出来るシステムが発達している為だ。USA参加者は, 遠来から来たため, 意欲も高く, 会議への出席率も良く, 全体としてUSAの学会の様な印象となった。

相対的に，ドイツの学者との交友が薄かった。隣国のフランスからの報告はプログラムにはなく，12日，コーヘン博士が，Jaqueline, R. さんを飛び入りで指名した。こうした進行は，国別報告がその国を代表した意見なのかどうか疑念を与えられた。

ブルノンブィーユの研究者として著名なデンマークのアシュングリーンさんは，率直に，会議が世界を代表しているのか疑問だと語った。

文献紹介は英文が中心で，業を煮やしたのか，インド代表バチアヤンは，「英文で書かれたインド舞踊紹介などは，殆ど意味もなくまた，そもそも分析的に舞踊を研究することに疑問がある。それは全体性精神性を絶えず問題にしなければならない」と時間オーバーの演説を打ち，参加者の拍手を受けた。

しかし，一方，中国，ソ連，などは，英文のダンス出版物が存在し，世界に知ってもらう努力が国の援助で成立しているなど，日本にとって，参考にしなければならない面もあった。

2） ダンス解釈学の可能性

舞踊へのアプローチは多様である。方法的には，古典文献，論文集・誌，教育訓練・技法，舞踊史，名作，心理的，生理的，運動力学的，美学的，社会分析的，姿態論的，舞踊譜的，比較舞踊的，等の研究などがあるだろう。今回，社会心理学的分野のデモンストレーションとしてフォースター，カント教授達の「ジゼル」の分析が行なわれた。それは，ジゼルをフロイド左翼的立場で解釈したもので，昼と夜，男と女，カルチャーとネーチャー，若さと年長，キリスト教と異教，支配者と被支配者，ゴーチェとハイネ，夢と死，ソロとコールド，ミルタ：力とアルブレヒト：優雅，19世紀ダンス狂，性的願望などの項目を立て，面白くまとめたものであった。

しかし，観点の一つ一つが妥当性を持つ充分な論考の時間も無かったため，反論も多く見られた。最大の問題は，ジゼルの身体表現の特徴が抽出されず，ロマンチック・バレエ全般と共通してしまい，そうなると彼女達の分析はストーリー分析になり，舞踊的には実りが薄くなる欠陥がある。ダンス解釈学の方法として，巨視的立場を導入することは，魅力的だが，微視的姿態・像の研究と総合し，個々のダンスに即したものが出来ないであろうか。

ダンス・ノーティションに関わる領域は，プラクティカルな面で，すでに一つの潮流を占め，また，ラバンセンター出身者も活躍していた。ニュージランドから来たジェニファー助教授は，昼食の会話で，「国際会議の後，ラバン・センターに学位論文のため長期滞在する」と語った。これは会議の一つの動向を示す例であるまいか。

3） 日本を知ってもらう

上林澄雄氏，市川雅氏などが，欧米雑誌の寄稿，舞踊団の紹介等を行ない，日本の現状についての資料はあるのだが，全体として日本について，知られていない。

東京バレエ団，舞踏派，あちこちのフェスティヴァルに顔を出す舞踊団等も，限られており，それらは，日本全体を知ってもらうものと云えない。

一方，日本に来た外来舞踊団に対する批評も，当該舞踊団等に知られておらず，日本市場での閉ざされたやりとりの感が強い。学会誌「舞踊学」も，英文の抄録すらない。

ブラジルの雑誌社，アフリカの大学等から日本の情報を求められ，個人的範囲で応答したが，日本の全体像を知ってもらう学会としての基礎的なペーパーが必要だと思った。

4） 来日希望の人々

世界各国から「是非，日本に呼んでくれ」との申し出があった。

アシュングリーンさん（デンマーク）はブルノンブィーユ研究の普及のため，日本の評論家から打診を受けたが，その後，連絡がない，是非，実現に力を貸して欲しいと，来日を希望している。

舞踊譜による再演を仕事としているグレリンガーさん（英国）は，かってドリス・ハンフリーの舞踊団に居たが，ハンフリーの主要な作品はもとより，ホセ・リモン等の作品を指導再現する。大抵は1週間もあれば完成する，という。いずれも，ギャラその他は，実費。

アフリカの民俗舞踊研究のクラークさんも来日を希望して，日本文化について研究したいと語っている。交通費さえ出してくれればと云う。

（興味のある人は，御一報下さい。）